



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

秋 高 SHUUKOU BAH1 馬 肥



©柴田ケイコ

「3館連携企画 生誕200年 河田小龍 —龍馬に世界を教えた男」展

「嘉永六年ノ九月十月ノ坂本龍馬力茅蘆ヲ訪来リ突然ト云ヘルニハ時態ノ箒ニテ君ノ意見必スアルヘシ聞キタシトアルヨリ小龍太ニ笑フヲ吾ハ隠人ニシテ書画ヲ嗜ミ風流ヲ以テ世ニ處ルモノナレバ世上ノ箒ニハ心懸ナシ何ソ」説ノアルベキヤト云ヘハ…」

『藤陰略話』にある小龍と龍馬の出会いです。嘉永六年の九月か十月に坂本龍馬が突然訪ねてきて、昨今の世情について意見を聞きたい、と言ったそうです。(時期は、横に小さく「七カ」と「十カ」「十一カ」と書かれていることから、その嘉永七年の可能性もあります。)小龍ははじめ、自分は隠遁の身で書画、風流をたしなむから世情のことについて意見などない・・・と笑って相手にしなかったようですが、最終的には「攘夷は無理。商業をおこし国力をつけることが先」と持論を述べた、といいます。結果、彼らは意気投合し、「・・・人ヲ造ル事ハ君(小龍)之ヲ任シ玉ヘ吾ハ是ヨリ船ヲ専ラニシテ傍ラ其人モ同ク謀ルベシ・・・(中略)・・・君ハ内ニ居テ人ヲ造リ僕ハ外ニ在テ船ヲ得ヘシトテ



「漂異紀略」大津本(巻1)より「アジア地図」(個人蔵・当館寄託)



「漂異紀略」龍馬記念館本(巻3)より「ボストン港」(当館所蔵)



「琵琶湖疏水鳥瞰図」(田邊家資料)(琵琶湖疏水記念館所蔵)

相別シス」となり、小龍が長岡謙吉ら弟子を龍馬のもとに送り込む流れになったということです。なぜ、龍馬は、絵師の小龍に最近の世情について意見を求めにいったのでしょうか？小龍は、幕末から明治時代にかけて活躍した土佐の絵師のひとりです。他方で、アメリカから自力で帰国した中浜万次郎ら漂流民の取り調べを行って『漂異紀略』にまとめたリ、当時最先端の産業技術を有していた薩摩藩の反射炉視察の土佐藩士らに「図取り役」として同行するなどの経験がありましたので、海外事情含め当時の様々な情報に通じていた人物でもありました。だからこそ、開国が攘夷か国論が揺れるなか、龍馬は小龍にこれからの日本のありようについて意見を聞きたかったのではないのでしょうか。

今年、河田小龍生誕200年にあたります。それを記念し、

(公財) 高知県文化財団が管理運営する当館のほか、県立歴史民俗資料館、県立美術館の3館が連携し、それぞれの特長をいかした展示を行います。3館の展示を通して、幕末土佐屈指の絵師であり、教養人であったシマル才人小龍の全貌をご紹介します。当館では、小龍という人物を輩出した時代や人脈、小龍が育てた弟子たちについてご紹介いたします。どうぞお楽しみに！

河村章代

10月23日(水)～12月15日(日)

高知県立坂本龍馬記念館

「龍馬に世界を教えた男」

11月1日(金)～令和7年1月5日(日)

高知県立歴史民俗資料館

「土佐の人々とのつながり」

11月9日(土)～令和7年1月5日(日)

高知県立美術館

「激動期への眼差し」

★各館の担当学芸員によるスペシャルトークやバスツアーなど関連イベントもモリモリです！

「龍馬と長府藩

―龍馬の新国家構想を支えた下関―展を終えて

7月5日から始まった「龍馬と長府藩 ―龍馬の新国家構想を支えた下関―」展が9月1日に終了した。会期中は8月8日に宮崎県で震度6弱を観測した南海トラフ西端での地震や、8月末に西日本を横断した台風10号など、ヒヤリとさせられる自然災害が発生した。

●念願だった伊藤家資料の展示

本展は、当館にとって念願の一つであった伊藤九三に宛てた龍馬書簡13通(以下、伊藤家資料)を初めて借用した展示であったため、無事に終わることができて安堵している。

当館は平成30(2018)年4月に、博物館機能を備えた新館をオープンさせ、今年で7年目を迎える。本館だけの頃は、資料を安心して収蔵展示できる環境ではなかったため、他館から資料を借りることが非常に難しかった。そういう中で長年の夢として抱いていたことは、京都国立博物館所蔵の龍国重要文化財に指定されている龍

馬資料と、宮内庁書陵部所蔵の薩長同盟裏書を含む木戸家文書、下関市立歴史博物館所蔵の伊藤家資料の3件の資料群を借用展示することだった。

これらの資料は、龍馬の功績や人柄を知る上で欠かせない資料でありながら、当館では長年真物を展示することができなかった。そのため、新館が完成した暁には、ぜひともこの3件を展示して、来館者の方々にご覧いただきたいと思っていた。こうした夢が叶い、令和元(2019)年には京都国立博物館所蔵の龍馬資料を展示し、令和3年には宮内庁書陵部所蔵の木戸家文書を展示し、今年、下関市立歴史博物館所蔵の伊藤家資料を展示することができた。これで念願だった3件の展示を全てクリアし、来館者の方々に本物の資料を通じて、龍馬の息吹を感じていただくことができた。さらに、館としても、この3件の展示は大きな実績となり、今後の展示に意味を持つはずである。

●本展の注目資料

さて、ここからは、今回お借りした伊藤九三宛龍馬書簡13通の中から、私が特に注目した1通を紹介したい。

それは慶応3(1867)年5月17日の短い書簡で、いろは丸事件の談判交渉を行うため、長崎へ到着した4日後に書かれたものである。この書簡は、これまで特に注目したことがなかったが、今回展示の準備を進めている中で、龍馬にとってかなり大きな転機となる書簡ではないかと感じた。

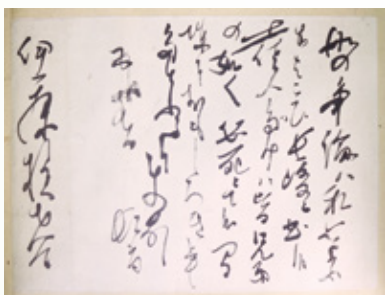
龍馬は下関を離れる際、伊藤九三や三吉慎蔵に遺書のような書簡を書いた。しかし、長崎へ出てみると、後藤象

二郎を筆頭に、土佐藩の人々が皆、兄弟のごとく一致団結して紀州藩との交渉に当たってくれた。龍馬は、御三家の一つの紀州藩が相手とい

うこともあり、土佐藩は脱藩浪人の集団である海援隊の言い分を信用せず切り捨てることもある、と想定していたのではないだろうか。そのため、死を覚悟して長崎へ行つたところが、予想と全く違った展開が待っていた。後藤は龍馬らの言い分をすべて信じて、紀州藩と戦う覚悟を決めてくれた。

この件で、龍馬は後藤の器の大きさを知り、信頼するに足る人物だと感じたのではないだろうか。短い書簡だが、龍馬の喜びが溢れた書簡で、踊るような大きな文字で書かれているのが印象的である。

三浦夏樹



伊藤九三宛龍馬書簡 慶応3(1867)年5月17日



展示風景(13通1巻の伊藤九三宛龍馬書簡)

りょうま館の夏休み2024 振り返り



9月に入り、夏の暑さもようやく少し落ち着いてきました。8月下旬には台風10号の影響で当館も臨時休館を行いましたが、それ以外は晴れの日が多く、県内外からたくさんのお客様にご来館いただきました。例年以上に暑かった今年の夏も、イベント「りょうま館の夏休み」を開催いたしました。

今年は初めて「子ども学芸員体験」のワークショップを、前後編2日にわたって開催いたしました。以前から構想を練っていたこちらの企画は上村学芸員が担当し、1日目は常設展示の展示紹介や、龍馬の手紙をもちいて「くずし字講座」を行いました。2日目は、展示にあたって、当館の建物にはどのような工夫がしてあるのか見学したり、複製の書簡や、模造刀を扱う体験を行いました。最後はワークショップの集大成として、学んだことをもとに発表するギャラリートークを展示室で実施しました。小学校低学年の参加者の方もいて、長時間のワークショップで大変だったと思いますが、皆さん集中力を切らすことなく熱心に学んでいる様子がとても印象的でした。



「初めての筆体験」では、自分で書いた筆文字でうちわを作るワークショップを行いました。高知県内の美保書道教室さまを講師としてお招きし、参加者が書きたい文字を上手に書けるように教えていただきながら練習を重ねていきます。大人の参加者の方も、子どもの頃に書道を習っていて懐かしんで参加される方が多く、納得のいく作品ができるまで何度も先生と一緒に練習をしたり、皆さん真剣に、かつ楽しんで取り組まれていました。まだ書道を習っていない子どもたちも「上手に書けた」と見せてくれると私も嬉しくなりました。ワークショップに参加することで夏休みの宿題がひとつ片付いた、というお子さんもいて、夏の終わりにワークショップを開催して良かったと、一安心でした。



そのほかにも、「学芸員による展示紹介」や「なりきり龍馬体験」、「龍馬と長府藩展」のクイズラリーや「隠れりょうまを探そう」など、昨年行った人気のイベントも実施し、お盆期間中の館内は大変にぎわっていました。

夏休みと同じくらいのにぎわいを見せるのは、11月の龍馬月間です。今年は11月15日～17日にかけて、様々なイベントを予定しております。龍馬の誕生日であり、当館の開館記念日でもある11月15日は、無料開館デーとしてどなた様も無料でご入館いただけます。そのほかイベントの詳細は随時HPや当館の公式SNSで発信をしますので、是非チェックをお願いします。

10月23日からは、「生誕200年河田小龍－龍馬に世界を教えた男－」展も始まります。秋の坂本龍馬記念館にも、どうぞご期待ください！

竹田 綾

わが須崎愛——その2

飛騰（令和3年10月号）に続く「その2」です。須崎市中町で鶏肉卸売業・「かしわの吉村」を営んでいた父方の祖父母宅のすぐ近くに弘法大師が開山した大善寺（須崎市西町）があります。

毎年8月には「大師祭」が開催されていて、その出色の催しの一つが長さ20m超の竜踊りです。もう今から40有余年前のことなのですが、当時高校生であった私と、双子の兄も担ぎ手の一人で、当時はドラとトランペット、クラリネットに、シンバルをセツトした大太鼓（この太鼓を叩くのは父）の生演奏に合せて、竜の口からは煙を放出させて爆竹も鳴らしながら勇ましい踊りを披露しました。ですので、私たち親子にとりまして大善寺は、里山ならぬ、さしずめ里寺のような身近なお寺です。

慶応3（1867）年8月に龍馬は唐突な土佐への帰郷をしています。その年の7月に長崎で英艦イカルス号水夫殺人事件が起こり、龍馬率いる海援隊に嫌疑がかかりました。この事件を巡っては、英国と幕府と土佐藩による交渉が土佐で、それも私

のふるさと須崎の洋上で行われたという事です。須崎の港はリアス式の海岸で、「入口が広く波穏やかな」天然の良港ですので、須崎が選ばれたのだらうと思われます。

この交渉のために土佐の佐々木高行大監察は神戸から薩摩藩の三邦丸に乗り込んで土佐に向かいます。その時に龍馬は、松平春嶽公が「この水夫殺人事件が英国との紛争に発展することを心配し山内容堂公に宛てた手紙」を預かっていて、三邦丸に乗り込み佐々木大監察と話しをしているうちに船が出航してしまい須崎の港に着いたということなのです。交渉時の須崎の港には、英国や幕府と土佐藩の船などが集結をし、それぞれパークス公使や幕府の重役、そして土佐藩の重役と龍馬らが乗船していて、土佐藩船・夕顔での交渉の結果によつては、「戦かも」という緊迫していた情勢下であったということですので、私のふるさとと先人の皆さんはさぞかし震えあがったことかと思えます。

この後、水夫殺人事件の解決は改めて、長崎での実地調査に持ち越さ

れます。そのため龍馬も濡れ衣を晴らすために長崎に向かいます。結局、9月になつてようやく英国の海援隊と土佐藩への嫌疑が解かれしました。佐々木大監察の回顧録には、英国との交渉の場所は当初、須崎の大善寺に設けていた（注）諸説あります）などとされています。この時、須崎に築かれていた土佐藩の砲台では、土佐藩重役の乾退助が指揮をする土佐藩兵が海上を監視していた由。同砲台は、須崎市西町と中町界わいの富士ヶ浜（須崎の港に通じます）に沿つて築かれていましたので、交渉場所の大善寺とは須崎市西町の「大善寺」のことであつたのだらうと思います。

このように私のふるさと須崎市西町と中町は、龍馬と幕末史の息遣いを偲ばせます。

お大師さん（大師祭のこと）では現在、子竜踊りも見られるということですので、たいへん感慨深い気持ちでいっぱいです。ぜひ一度、「大師祭」にお出かけください。

「高知県立坂本龍馬記念館研究紀要 第6号」を発行しました。

学芸員の研究成果を掲載しており、今回の執筆者およびタイトルは右の通りです。

- ・「八月十八日の政変直後の京都における支配機構」
上村香乃
- ・「坂本龍馬の帰郷についての考察」
三浦夏樹
- ・「岡崎家文書翻刻 五 岡崎菊右衛門日記（安政三年～五年）」
亀尾美香
- ・「（資料紹介）当館収蔵の河田小龍作品」
河村章代

A4版51頁、700円

当館ミュージアムショップにてお求めください。

当館HP「ミュージアムショップ」内にて、通信販売も行っております。

龍馬の手紙

24

二度目の土佐藩復帰 のカギとなる手紙

(慶応二年十一月 溝淵広之丞宛)

私と坂本龍馬の出会いを振り返ると、小学校三年の時分のように思う。当時、親の影響で時代劇を見てはいたものの、歴史そのものにはそれほど関心がなかった。小三のクリスマス朝、目覚めてふと横を見ると、お願いした記憶のない小学生向けの日本史図鑑があった。未だになぜあの図鑑が贈られたのかは分からない。だが、思えばあの図鑑が歴史に触れた最初であり、龍馬との出会いでもあった。

岡山県で育った当時小学生の私にとって、龍馬は慣れ親しんだ人物ではなく、織田信長や徳川家康と同じように「なんだかすごい人」程度の認識だった。時が過ぎ、歴史を学んでいく過程で、龍馬が東西に奔走する姿や人としての

面白さに魅了された。

初めて龍馬の手紙を観たのは意外と最近で、大学生のときに京都の霊山記念館で展示されていたものだ。当時は単に「これが龍馬の手紙か！全然文字読めないな。」と感動と驚きを覚えたことを記憶している。

さて、よもやま話は少し横において、表題の資料について触れておこう。

慶応二（一八六六）年十一月、溝淵広之丞に宛てたものの下書きとされ、龍馬の家族に送ったと考えられている。当時、二度目の脱藩中であつた龍馬は、知己の土佐藩士に会つても、他人のふりをしたという。それは、海軍を興すという志を果たすためであり、心根では強く故郷を想っているという内容が記されている。名文といわれる本文は、長岡謙吉と相談して作成したともいわれ、土佐藩復帰のための政治的な文言か、龍馬の本意か、私には分からない。いずれにしても「土佐藩復帰のカギ」とされるこの手紙により、龍馬は土佐藩に復帰し、海援隊が創設されていく。文字通り命懸けで志のために奔走した龍馬には遠く及ばないが、私自身も己の志に従って、高知の豊かな歴史を伝えていきたい。

水松 啓太
(高知県立高知城歴史博物館学芸員)

新連載!

龍馬館の あの日 あの日 あの時



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介する新連載です。 No.1

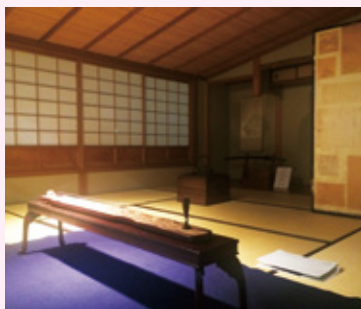
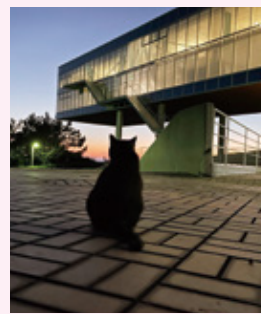
夜の龍馬記念館

高知県立坂本龍馬記念館の閉館時間は17:00(最終入館16:30)です。日が沈んだ後の龍馬記念館をご覧になったことのあるお客様はあまりいらっしゃらないのではないのでしょうか。周辺の店舗もこの時間になると閉店していることが多いためか、観光のお客様の多くは日没前に市内中心部へ向けて移動を始めるようです。

坂本龍馬記念館は桂浜の背後の丘陵地という立地上、タヌキなどの野生動物とばったり遭遇すること、珍しくありません。突然の予期せぬ出来事に嬉しくなりますが、人間以上に彼らの方が驚いているのかもしれないですね。夜の城跡は怖いという感想も耳にしますが、夜にしか見せない表情もあり、月や星などの自然の灯をワクワクと眺めたりもします。

日中は楽しそうな賑わいにかき消されて耳に届かない波の音も、夜の静けさの中では自己主張が激しく、はっきり聞こえます。暗い海の方角から絶え間なく聞こえる波の音を浴びながら、本日も帰宅の途に就きます。おやすみなさい。またあした。元気な姿でお会いしましょう。

佐々木 恵



現代では、スマートフォンでアプリを開けば、瞬時に現在地とその周辺の地図を目にすることができる。私たちの日常には様々な地図があふれているといえる。ところで、国土地理院は明治時代以降現代に至るまで地図を作成してきた。過去の地図を見ればその時代の地域のあり方が一目で把握できる。今回は、そのためのツールの一つであり、複数年代の地形図を比較参照できる「今昔マップ」をご紹介します。

早速だが、図1をご覧いただきたい。これは「今昔マップ on the web」で明治後期～昭和末期にかけての四つの時期の地形図を並べて表示したものである。マークしたのが高知城で、いずれも同じ範囲を示している。明治後期(1906)・1907)の段階における市街地の範囲は、江戸時代の城下町のそれと大差なく、周辺には田んぼが広がっていた。そこから段階的に田んぼは消失していき、現在の土讃線の北側や鏡川の南側の大部分が市街地化した様子が視覚的に理解できる。現代都市・高知市の成長の過程がここには表れている。

図1では見づらいため、是非各自で確かめていただきたいが、細部にも様々な違い、つまり土地利用の変化が読み取れる。鉄道が敷設されたり、朝倉地域において昭和前期(1933)までは確認できた「歩兵第四十四連隊営」、「練兵場」が、戦後(1965)にはそれぞれ「高知大学」、「若草町」の住宅街へと変化していたりする様子は一目して把握しやすい。こうした一つ

一つの変化が、近代において地域が辿った歴史を物語る素材なのである。

このように新旧地形図を見比べることで、地域構造の変遷、あるいは時代を経ても変わることない地域の固有性といったものが浮かび上がる。また、特に明治期地形図は、近代の大規模な土木工事やそれらに伴う都市構造の変化を受ける前の状況を示していることが多い。つまり、そこに描かれた河川や街路、土地利用は江戸時代以前のあり方がある程度継承していると考えられ、前近代の歴史や地域を考える際に強力なツールとなる。

例えば、高知市内から土佐市方面に向かう場合を考えてみよう。現在では国道五六号を利用し、朝倉から弘岡にかけては新荒倉トンネルを通過する。但し、このルートは明治末期の地形図では確認できない。そこで確認できるのは、朝倉からグネグネと峠越えをして、荒倉神社の前を通過して弘岡へ出るルートである。このルートも江戸時代の古道とずれる部分もあるが、前近代の土佐西街道(高知から中村方面へ向かう)に沿う道である。脱藩時の龍馬が須崎を経由して梶原に向かった場合は、この土佐西街道を通ったことになる。

「今昔マップ」は日本全国をカバーしているわけではないが、全都道府県庁所在地を含む五二地域の旧版地形図が収録されている。旧街道や廃線歩きといった趣味的なものから、研究・教育、さまざまな調査など広範に利用ができる。是非一度、お手持ちのパソコンやスマートフォンで検索・利用していただければと思う。

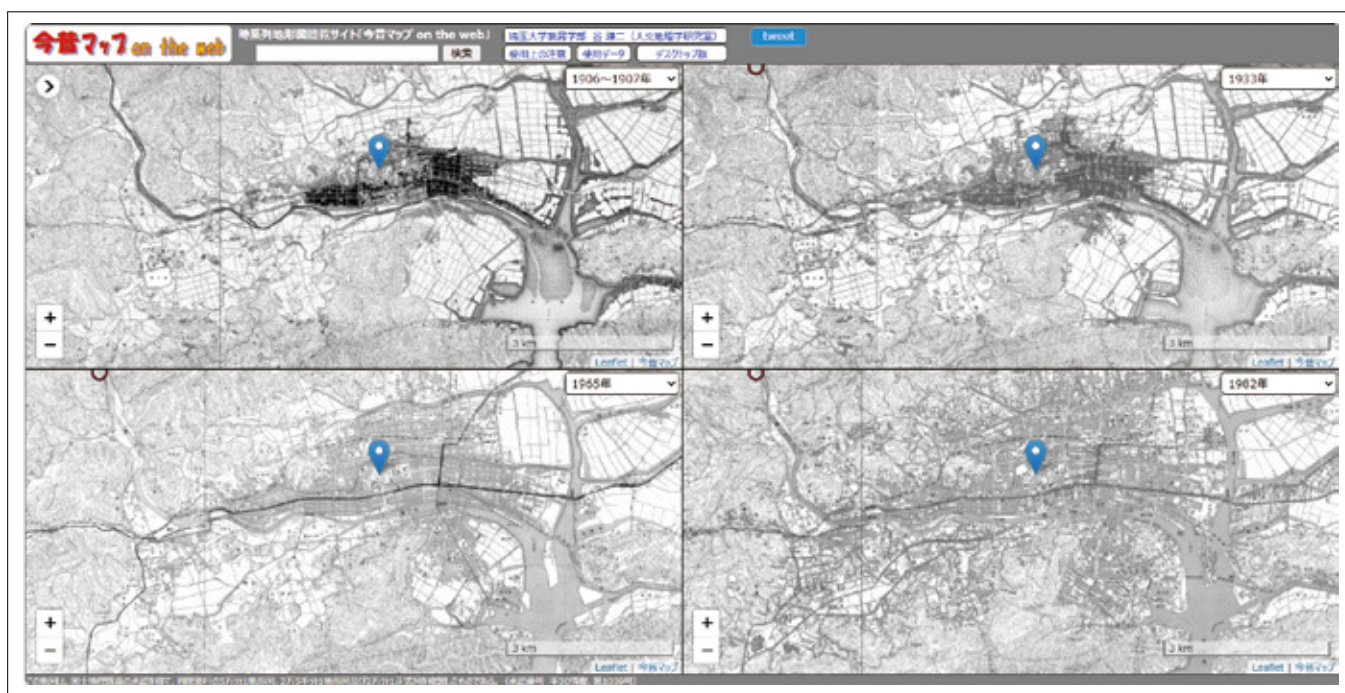


図1 新旧地形図にみる高知市街(この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C) 谷 謙二)により作成したものです。URL <https://ktgis.net/kjmapw/>)

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や、企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。
数ある商品の中から今回は、最近リニューアルして再版された当館人気No.1の一冊をご紹介します！
またこの夏休みに開催されたイベントの様態もご報告いたします。

商品紹介 龍馬書簡集

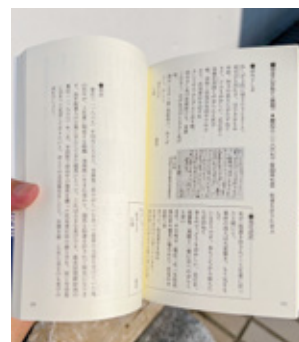
本書は坂本龍馬記念館が所蔵する、真筆と複製の龍馬が書いた手紙を現代語に訳した書簡集です。

当時書かれたままの手紙では、なかなか読み下す事が難しい為、多くのお客様から“もっと身近な現代語で読んでみたい!”とのご要望をいただき作られたもので、これまで多くの龍馬ファンに読み親しまれてきました。

ページを開けばすぐに[読み下し文→原文→現代語訳]の順で記された書面はどなたでも読みやすく、その時代の背景が目に見えて感じられる内容に、時間も忘れてどんどん読み耽ってしまうかもしれません。今年6月から販売されている四訂版は新たに9つの手紙が追加され、より充実した一冊となりました。

長文で書かれた数多い手紙の中でも、家族に宛てた手紙からはその人柄を身近に感じられる、とても貴重な資料としてお読み頂けます。時代を動かした龍馬の広い心の中を、実際に書かれた手紙を通して覗いてみて下さい。

この他にもまだまだ色々な商品を取り揃えておりますが、今後価格変動や数に限りのある商品もございます。どうぞご了承下さい。



価格1,000円(税込)

夏のイベントご報告 大好評!! 釣って当てよう!おまけ付き缶バッチくじ

この夏日々猛暑の続く中、記念館には多くのお客様が足を運んで下さいました。

県外はもちろん、海外からお越しのお客様にも龍馬の手紙や関連する品々をご覧頂き、高知にやって来て歴史の見聞を今まで以上に深めて頂いたなら嬉しく思います。

夏休み期間には、ミュージアムショップでいくつかのイベントを開催しました。

そのひとつがお子様だけでなく、家族皆で楽しめる“釣って当てようおまけ付き缶バッチくじ”です。

坂本家の家紋バッチが何色か入っている箱の中から、磁石付きのお手制竿で釣り上げたバッチの色により、その色のおまけをゲット出来るというワクワク企画でした!

欲しいおまけが手に入るまで1回300円にも関わらず、何度も挑戦されるご家族もいらっしゃったほどです。

結果まさかの毎回同じ色のバッチが出てしまい、ある意味すごい!と苦笑いされる場面もあったりして、きっとこの夏のエピソードのひとつとなった事でしょう。

また今後も折々に際し楽しいイベントを予定して、皆様のご来館を心よりお待ちしております。



西川 知佐

■「海に見える・ぎゃらりい」

桂浜の西海岸が一望出来る、海に見える・ぎゃらりい。私が高知に来て一番に心を奪われたのが、まさにこの、桂浜の西海岸でした。

まだ高知に居を構えていない頃、高知の市街地から出発するバスに揺られて坂本龍馬記念館へと向かっていた私は、今、自分が高知市のどのあたりにいるのかもわからず、トンネルや狭隘な道を通るバスの中から外界をぼんやりと眺めていた中で、急に視界が明るくなったのを覚えています。今ではあれが、花街道にさしかかったあたりの出来事であったことがわかり、となれば光り輝く太平洋の仕業であることは明らかなのですが、当時はなぜ明るく感じたのか、当然のごとくわかりませんでした。バスが左折して花街道へと出た後、おもむろに右手を見て、そこであっと息を飲んだ記憶が今でも鮮明に残っています。

東京育ちで、その後住んでいた場所と言えば、滋賀県や京都市内という、なんとも海とは縁の無い生活をしていた私が唯一知っている海といえば、親の実家がある日本海でした。日本海といえば、冬にはおいしい魚や甲殻類がたくさんとれるイメージがある反面、雪がしんと降り積もるせいなのか、曇り空が海に映った黒い海という印象があり、そのため、私の海の印象は冷たくて黒い、といったものでした。故に、あの日、バスの車窓から太平洋を目の当たりにして、その明るさに、青さに、感動したのです。

それから坂本龍馬記念館に勤めるようになって、海に見える・ぎゃらりいから桂浜の西海岸が見えることを知り、とても嬉しくなりました。当時目にしたのは、桂浜の朝の姿でしたが、勤めてからは昼の姿や夕の姿を見ることも出来、夕日に輝くオレンジ色の海を見られた時は、一つ、幸せをもらった気分になります。と同時に、当館に来られたお客様にも、西海岸を眺めて同じように感動していただけたらと思っています。

土日は催し物などで賑わっている海に見える・ぎゃらりいですが、催し物がない日に時折そこを覗くと、椅子に座って桂浜を眺める人や、ガラス窓の前に立ってカメラを構える人、中二階で飲み物を片手に物思いにふける人など、桂浜と向き合って静かに時を過ごすお客様と出会います。その中にはもしかしたら、私のように太平洋の海に心を奪われた人もいるのかもしれない。

催し物で活気があふれている海に見える・ぎゃらりいもまた一興ですが、イベントがない日の、静の一面も、是非当館に足を運んでいただいて味わっていただければ幸いです。



上村 香乃

入館状況

2024年9月20日現在

(1991年11月15日開館以来 32年311日)

◆入館者数 4,693,625人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 756,865人

編集後記

昨年はわずか1日だった高知市の猛暑日数(最高気温が35度以上の日数)が、今年は19日を数えました(9月10日現在)。加えて8月8日の日向灘地震、同月末の台風10号(当館も2日間臨時休館となりました)など、今年の夏は普段以上に自然の脅威を感じることが多かったように思います。だからこそ「秋高馬肥」、さわやかな気持ちのいい秋の天候が楽しみな今日この頃です。秋の夜長に積読している本を少しずつ読み進めたいと思います。(や)

館だより“飛騰”第131号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

発行日 2024(令和6)年10月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般 500円(企画展開催時 700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

記念講演会

「坂本龍馬33年、中岡慎太郎30年 両館の所蔵品から見た二人の生涯」

北川村立中岡慎太郎館 係長・学芸員 豊田 満広 氏

坂本龍馬は享年三三、中岡慎太郎は享年三〇であるが、本年は坂本龍馬記念館が開館三三周年、中岡慎太郎館が開館三〇周年にあたる。何とも粋な巡りあわせを感じずにはいられない。本講演では、両館が開館以来どのような資料を収集してきたのかを振り返りつつ、博物館や学芸員についてその一端を紹介したい。

まず坂本龍馬記念館は、龍馬・幕末維新・土佐藩に関する資料を収集し、龍馬真筆一四点を含む、二二〇〇点余りを収集してきた。龍馬はもとより幕末志士の遺墨類や錦絵、土佐藩京都藩邸史料などを所蔵し、その他寄託資料も多数管理している。とくに藩邸史料は藩の公的資料が僅少ななか、白眉といえる史料群である。これらを分析していくことで様々な史実が発掘され、幕末土佐藩の研究が大いに進むことが期待される。

慎太郎に関して言えば、藩邸史料No.51によって、文久三年（一八六三）九月に慎太郎にも藩から入牢命令が出されていたことが証明された。また、寄贈された新井竹次郎関係史料の中には、文久元年一月二六日付慎太郎書状も含まれている。文字の太さや筆跡にも慎太郎らしさが表れており、彼の人生哲学が垣間見える貴重な史料といえる。続いて紹介する慶応三年九月四日付龍馬宛木戸孝允書状は、七通しか確認されていない龍馬宛の書状の一つである。倒幕全体を能の大芝居に見立てるとともに、龍馬と「ひこ」（中岡慎太郎？）の相談・尽力が肝心であると述べている。他の史料と組み合わせることで、龍馬と慎太郎の「倒幕」計画をリアルに伝えることができる資料だろう。

ところで、龍馬書状は確認されているものが約一四〇通、現存するのが一〇〇通ほど、一方慎太郎書状は六〇通ほどが確認されているが、現存するのはその半数ほどである。事件の経過や周辺事情、自らの感想などを事細かに書き付けた龍馬に対し、慎太郎は内密なことばもちろん、龍馬ほど詳

細には手紙で述べない人物であった。こうした事情から、慎太郎の動向や人間像は龍馬に比べて分かりづらい。また慎太郎は「石川清之助」「横山勘蔵」といった多くの変名を用いていた。つまり変名に注目することで、新たな慎太郎関係史料が発掘されることもある（新発見三点）。さらに、慎太郎は変名によって筆跡も複数の書状を並べて展示し、彼のスパイ的活動と題して紹介することが可能である。

このようにどの資料を組み合わせるか考え、各地の収蔵機関と史料の借用交渉を行い、許可された場合は借り出したうえで展示を行うことが学芸員の主要な仕事の一つである。調査研究、情報収集や他機関との交渉といった業務遂行の上では、幅広い人脈が重要となる。

次に中岡慎太郎館は、慎太郎・幕末維新・土佐藩に加えて、地元北川村の歴史に関する資料も収集し、現在四〇五点を収蔵している。なお、古文書群は各一点としてある。ただし慎太郎の真筆は所蔵しておらず、これまでに計三二点の複製を作成、収蔵してきた。これらのうち一九点を常設展示している。それらを見比べて、内容はもちろん、各書状で微妙に異なる書きぶりから、その時々々の慎太郎の置かれた状況や心情に思いを巡らせていただきたい。

慎太郎館自慢の品は、慎太郎の袴（北川村指定文化財）である。庄屋クラスの正装であり、この資料から慎太郎の身長は一五三cmと推定される。加えて、慎太郎の妻の実家に伝わる利岡家文書（一二六五点）は、同家が庄屋を務めた地域の農村支配、さらには幕末政治に関する情報を得られる点で貴重である。高知県立高知城歴史博物館の協力を得て目録を作成、整理を進めてきた。これらを用いた研究の深化が今後の課題である。さらに陸援隊士の関係資料も所蔵している。中でも「舊友覚書」は明治二三年〜二五年の間に作成された陸援隊士の名簿である。当時の役職や住



豊田氏ご講演の様子

所、死没者の場合はその年月日や墓所等をまとめたもので、隊士の維新後の動向を探ることが出来る。隊長として「横山正太郎」と誤った名が記されていることは、陸援隊が急ごしらえの集団で、組織的に活動する前に解散された経緯を反映していると考えられる。また中芸地区出身の志士である二十三士関係の資料は、地域史を考える上でも重要である。

以上、両館の所蔵資料を中心に説明してきたが、最後に博物館・学芸員について触れておきたい。

博物館とは、資料を収集・保存・管理・調査研究・公開する施設である。ここでのいう「資料」とは、過去の人間の営みや活動、過去の出来事を知るための手がかりとなるものである。そして学芸員とは、資料に関する博物館業務を担う存在である。特に調査研究を遂行し、その成果を展示・講演等で公開するのは学芸員の重要な任務である。博物館という「ハコ」に、「血液」を巡らせて「生きた」存在にするのが学芸員で、資料と市民の橋渡しの存在でもある。博物館・学芸員、そして日々応援して下さる市民の皆さん、三者の有機的な繋がりによって、資料という財産が後世へと残り、活用されていくのである。

研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会総会

当日次第

【テーマ】

「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、
その精神を現代に生かそう」

【日時】2024年6月15日（土） 12時30分～17時

【会場】高知県立坂本龍馬記念館新館ホール

○12時30分 会員受付

○14時40分

・総会（書面決議報告）

○13時 一般受付・入室

○13時15分

・会長挨拶

・来賓挨拶

高知県教育次長

今城

純子氏

高知市教育次長

竹内

清貴氏

○13時30分

・龍馬記念館企画展記念講演会

「坂本龍馬三三年、中岡慎太郎

三〇年―両館の所蔵資料から見

た二人の生涯」 豊田 満広氏

（北川村立中岡慎太郎館係長・学芸員）

○15時

・研究発表会

「史料から龍馬脱藩をもう一度考える」

知野 文哉氏

（坂本龍馬研究家）

二〇二四年度の事業計画や
予算等の総会審議事項につい
ては、事前に書面議決を行
いました。その結果は次の通り
です。

総会書面議決の ご報告

会員数 86名

第1号議案（1）（2）

承認 62名

回答なし 24名

第2号議案（1）（2）

承認 62名

回答なし 24名

以上により規約第九条（議
決）に基づき、すべての議案
について、過半数の承認を
もって可決されましたこと
をご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会

会長 宮 英司

高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会は六月一五日、
坂本龍馬記念館新館ホールに
おいて、第一六回総会・研究
発表会を開催した。
昨年同様総会では書面決
議が行われ、昨年度事業報告、
今年度事業計画とも承認さ
れた。
その後、龍馬記念館との共
催行事として、開催中の企画
展「龍馬記念館の蔵出し 学
芸員セレクション」展の記念
講演会を開催した。北川村立
中岡慎太郎館係長・学芸員の
豊田満広氏を講師としてお迎
えし、龍馬と中岡慎太郎の生
涯についてご講演いただいた。
続いて研究発表会を行っ
た。坂本龍馬研究家の知野文
哉氏が、史料に基づいた龍馬
脱藩の再考をテーマにご報告
された。

研究発表会

「史料から龍馬脱藩をもう一度考える」

知野 文哉氏（坂本龍馬研究者）

文久二年（一八六二）の龍馬脱藩に関する一般の理解は、大正元年（一九一）刊行の『維新土佐勤王史』の記述に基づいている。ただし同書は龍馬の死後四〇年以上後に編纂されたものであり、その成り立ちを踏まえると、実証研究の視点から見れば全幅の信頼が置ける著作ではない。そこで本発表では、『維新土佐勤王史』から一旦離れて、史料に添って、三つの視点から改めて龍馬脱藩を再検証してみたい。なお以下は、あくまでも「試論」であり「私論」である。

第一に、龍馬は武市の密使だったのかという点を検討してみたい。文久元年九月二五日、江戸で土佐勤王党を結成した武市半平太が土佐に帰国する。このタイミングで龍馬も土佐勤王党に加盟したと思われるから、龍馬が武市の密使として萩の久坂玄瑞の許に派遣されることは十分考えられる。ところが同年一〇月一五日頃（武市の帰郷から三週間足らず）に土佐を出国した龍馬が萩の久坂を訪ねたのは、翌年の正月一四日のことである。「密使」が三ヶ月も経って、久坂を訪ねることは疑問を感じざるを得ない。しかも同月二三日に萩を発った龍馬は、更に帰途大坂に立ち寄るなどして、一ヶ月後の二月二九日にやっと土佐に帰っている。これらのことから、龍馬の久坂訪問には緊急性がなかったと思われる。龍馬が武市の密使であったとは考えにくい。

第二に、龍馬はなぜ脱藩したのかという点を考察してみたい。文久元年末から翌年にかけて、西国志士による義挙計画が高まりを見せていた。薩摩の樺山三円は久坂に書簡を送り、長州との連携を模索している。こうした情勢の中で萩にやって来た龍馬は、久坂の「草莽崛起論」を聞き、すっかり久坂に感化されてしまったと思われる。更に萩にとどまっていた樺山の使者・田中藤八から薩摩の情勢を聞いたこともあり、龍馬は大いに奮発し、自分も京都での義挙に参加することを決意したのではないだろうか。ここに初めて龍馬は「勤王の志士・坂本龍馬」として、独自に動き始めるのである。ただしこの段階では義挙の具体的な期日等は示されず、まだ漠然とした情報であったから、龍馬は続報を待って一旦土佐に帰ったと思われる。

龍馬の一ヶ月後に萩を訪れた吉村虎太郎は、草莽義挙に加え、薩摩藩国父・島津久光の率兵上京が目前に迫っているという具体的な情報を得る。薩摩藩上京のタイミングで決行される草莽義挙への参加を決めた吉村は、すぐさま土佐に帰国し、その後脱藩して下関へと向かう。吉村の脱藩に同行した沢村惣之丞は、下関で改めて薩摩藩の明確な動向を把握し、同志勧誘のため土佐に戻る。龍馬は沢村から得た情報によって、目前に迫った義挙参加のための脱藩を決意し、三月二四日に決行したのである。

第三に、脱藩した龍馬はどうしていたのかという点を考えていきたい。脱藩後の龍馬が薩摩を訪れたことは、諸史料からみても事実と思われるが、義挙参加のために脱藩した龍馬がなぜ薩摩に向かったのだろうか。

脱藩自体がどれほどの罪であつたのかについては未だ明らかでない部分もあるが、龍馬に四月八日に発生した吉田東洋暗殺の嫌疑がかかっていたのは事実である。現時点では、脱藩後の龍馬の動向を、①吉村、久坂らの上京を知り、後を追って上方を目指した、②しかし何らかの理由で、吉村と合流することができないうちに、③四月二三日に寺田屋事件が起こり、草莽義挙計画が瓦解、さらに自身に吉田東洋暗殺の嫌疑がかけられていたことから逃亡生活に入り、④逃亡する中で九州を訪れた可能性があると推測しておきたい。

六月一日には大坂にいたというのが、史料で確認できる脱藩後の龍馬の最初の足跡であり、二ヶ月ほど上方に滞在した後、江戸に下ったようである。当時、土佐藩主・山内豊範の参勤の行列が麻疹の流行で大坂に足止めされており、脱藩者である龍馬も、日々の生活に苦勞していた。これらの先の見えない状況から、龍馬は、人脈や土地勘がある江戸へ向かう方が賢明だと判断したのではないだろうか。

併せてこの時期、龍馬と行動を共にしていたと思われる、間崎滄浪（哲馬）の存在にも留意すべきである。当時、江戸には勅使・大原重徳一行や前藩主・山内容堂らが滞在しており、江戸の情報を京都や土佐の同志に送るのが、間崎の重要な役割だった。そのサポート役として、龍馬がスカウトされた可能性も考えられる。間崎の海軍への理解や多彩な人脈は、文久二年後半の龍馬に大きな影響を与えたと思われる。

その後、文久二年冬の勝麟太郎への入門、翌年二月の脱藩赦免、さらに青蓮院宮令旨事件で間崎が罪を得たことなどから、龍馬は本格的に海軍修業（ただし主には勝の政治活動のアシスタント）へと進路を転じていくのである。



知野氏発表の様子

紫式部が地獄に堕ちて

宮川 禎一

大河ドラマ『光る君へ』の話
題です。

平安時代末期に平康頼が著した『宝物集』(新日本古典文学大系40)の「巻第五」にこんなことが書いてあります。

ちかくは、紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患(くげん)しのびがたしよし、人の夢にみえたりけりとして、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おぼえ給ふらんものを。

平安時代末期には紫式部は『源氏物語』という「虚言の物語」を書いた罪で地獄に堕ちて苦しんでいる夢を見た人が居るといいうわさがあって「歌よみども」すなわち文芸者たちが集まって彼女を地獄から救い出すために手分けして写経をして彼女を供養した(源氏供養)という意味です。お釈迦様が示した「妄言の戒」から紫式部のことを「妄言を書いて人を惑わした者」と見る考え方です。彼女のために写経をした「歌よみども」もまた三十一文字で虚言する立場です。



京都市上京区紫野の紫式部墓

そうですが、嘘(虚言・フィクション)を書く歴史小説家やドラマの脚本家は地獄へ行くのです。か。例えば『竜馬がゆく』を書いた司馬遼太郎先生はどうでしょう。実際には地獄も極楽もないとは思いますが、この紫式部の墮地獄伝説には、事実と真実との関係の問題が横たわっています。虚偽と事実の間にこそ真実があることを「虚実皮膜論」と言いますが、『源氏物語』のような虚言の小説こそが「人間の真実」(男女の愛慾の普遍)を表現しているのだと思います。歴史研究者が主張する「歴史の真実とは正しい事実のことであって、他者の感情などこそその不可知だ」とは異なるのです。事実とは人間とは無関係ですが、真実を人間抜きに考えることはできません。この世は「嘘という真実」と「真実という嘘」が混在して成立しているのだと思います。

東京に先祖の墓を訪ねて

前編



小島 一男
(執筆者)

東京芝・増上寺の門前にある安養院に立ち寄ることができた。当寺は旧幕時代山内家とは非常に縁の深い寺である。戊辰戦争時には官軍として東征した、板垣退助が大隊司令官を務める迅衝隊を中心勢力とした土佐藩兵の江戸本陣が置かれた所である。

坂本龍馬暗殺後に海援隊隊長を務めた長岡謙吉(明治六年に病死)夫妻の墓もあるお寺の北側には、土佐藩留學候補生の墓が四基安置されている。左奥から迅衝隊二番隊長小島捨藏(二九歳)、小笠原彦彌(二六歳)、川上友八(二八歳)、谷神之助(二二歳)である。彼等は板垣退助の推薦により選ばれた若者達だ。明治維新に活躍した所謂戊辰戦争における官軍側の功労者

であり、その功績を認められたものである。

小島家の先祖は、年譜によると長宗我部元親弟吉良左京進親貞に仕えた小島九左衛門氏経である。主家滅亡後浪人し、吾川郡仁ノ村に住したとある。その数代後山内家二代藩主忠義公に仕えた、小島次左衛門重徳を元祖とする。代を重ね、七代小島重左衛門徳隣の次男として生まれたのが、小島捨藏殿磐である。

『慶応四戊辰会津征討日記 式の巻』(弘田親厚)によると、土佐藩は板垣退助が大隊司令官を務めた迅衝隊を主力とする大部隊となった。土佐軍出立の二日前である四月十八日の前後、旧幕府軍が宇都宮城を攻略し、官軍である彦根藩の隊長が討死する苦戦となった。土佐と因幡の両藩に加勢が命じられたのである。前線の様子がわからぬまま下野国小山に達した軍医弘田親厚は、一刻も早く駆けつけ本藩勢と死生を共にせんとした。途中にて賊に出会うならば、存分に勇戦

し潔く討死せんと、一同は草鞋をかえ帯も引き締めて兵糧米を食し、かねて携えてある銃丸をも込め替え、無用の品は打ち捨て身軽く出発。何時にでも賊と打ち合う覚悟にて……悲壮な覚悟で小山を出発した。これによると、医師たちも戦闘員の一人であったようだ。

四月二十二日、風雨の中を一時も早く前軍の戦いに加わらんと、韋駄天のごとく走り、ようやく壬生の城に入った。下野国安塚村で激戦となり、小島捨藏第二小隊長、眞田戒作第六小隊長等二十数人が負傷し枕を並べて横たわっていたとあり、乱戦であつたようだ。その時のことを谷干城も記している。味方が少数であることを敵に悟られぬよう、砲をうち、虚勢を張り、防御厳重の体を示すとある。大鳥圭助率いる旧幕府軍は、谷干城等の偽装工作が功を奏し、壬生城突入を断念した。

中編につづく